

第3章 八重原工場

八重原工場設立

1. Sweet Tone 松本ピアノ

関東大震災で焼失した月島工場は、再建後、長男広に譲り、新吉は八重原村外箕輪キエハラ ソトミノワにピアノ工場を建てた。【図3-1、3-2】

ピアノの音色を大事にする新吉と、自動ピアノやコンサートグランドピアノなど新型ピアノ作りに熱心で、企業拡張を目指して「エチ松本ピアノ」(H.MATSUMOTO)を作る長男広はピアノ作りの考え方が違い、新吉は八重原村の隠居宅地の庭にピアノ工場を建てた。

明治40年代から大正時代にかけて月島工場ピアノ作りを修業した宇都宮信一は、『宮さんのピアノ調律史』(宇都宮信一著、東京音楽社)に八重原工場設立を紹介している。(資料編：引用記事参照)

『松本新吉伝』(大場南北著、うらべ書房)(資料編：引用記事参照)も八重原工場建設の経緯を紹介している。『宮さんのピアノ調律史』が調律師宇都宮信一の視点で書いているのに対し、『松本新吉伝』は松本新吉の菩提寺光聚院住職大場南北の視点で書いている。どちらにも、長男広は大量生産方針でピアノを作り、八重原工場の新吉は経済性よりもピアノ音色を重視したことを紹介しているのが共通している。

工場は狭いながらも、ピアノ製作、組立て室、木材乾燥室などからなり、工場の隣に洋風建築の事務所があった。事務所は大正時代のモダン好みの建物で、応接室のシャンデリアは当時の雰囲気を与え、隣室には八重原工場製のピアノが置いてあった。

2. 六男新治

大正12年(1923)9月、関東大震災のとき、六男の新治は18歳で青山学院の中学生だったが、それまでは自動車作りに惹かれていた。明治40年に、日本で自動車を作った人はいるが、自動車産業はまだなかった。大正時代になると、フォードなどアメリカ製自動車が輸入され、タクシーの営業が始まり、梁瀬商会ヤノセ創立など、自動車販売会社ができた。その頃育った新治は、ピアノよりも自動車に興味を持ち、自動車を作りたいかった。

『松本新吉伝』(大場南北、うらべ書房)

新治氏は、自動車業界の現状を眺めて、何とか自力で自動車の部品を製造して、日本の自動車を造ろうという夢を持っていた。その夢たるや、まさに「壮大」の一語に尽きるものといわなければならない。……新吉氏の後妻つね夫人には、はじめに女子二人が生まれ、三人目で漸く男子を儲け、その子は新治と命名された。新吉氏には終生七人の男の子(先妻に男子五人)があったが、父の名の一字「新」を冠したのはこの子だけなのを見ても、特にこの子の出生を喜んだのであろう。この新治氏は、松本楽器製造所が、株式会社に衣替えした当時(大正12年)は、まだ青山学院中等部四年生であった。この新治氏は、生来

父の抱いていた「一家に一台のピアノ、一台の自動車」の、そのピアノの方ではなく、自動車の方に早くから関心を寄せていて、将来自分の手で自動車を製造したいという青雲の志を持っていた。母のつねは、この新治の抱いている大それた夢に真向から反対して、ある時、怒って手にした火箸で新治を打ち据えたこともあったという。母にしてみれば、父が苦心して経営しているピアノ製造を他にしてわが子の将来は到底考え及ばなかったのに相違ない。しかし、父の新吉は、わが子新治の考えを諒としてひそかにヤナセ（梁瀬）自動車工場を見学したりして、その将来に期待を抱いていたのであった。

関東大震災の後、大正13年の八重原工場設立を機に、新治はピアノ作りに専念し、昭和3年に父新吉から一人立ちしての第1号ピアノが完成した。新治23歳であった。新治のピアノ作り技術習得は非常に早かった。新治の技能、集中力が優れていたことの証でもある。Sweet Toneを信条とする松本ピアノを製作した松本新治は二代目といえる。昭和4年、地元の三島小学校に新治製作第1号ピアノを納入した。

八重原工場で作った松本ピアノのブランドS.MATSUMOTOのSは、新吉、新治と続いたピアノ作り名匠の名前のイニシアル“S”（「新」）であるとともに、松本ピアノの音色Sweet Toneのイニシアルでもある。

八重原工場では、農繁期には農家の仕事に帰っても良いものとして地元の若人を採用し【図3-3】、ピアノ作りの初歩から教えた。工場稼働初期には、月島工場のベテラン職人が応援にかけつけ、新入社員の指導役を務めた。新治を中心とする八重原工場職人に、後で新吉の弟松本利助や七男剛夫が加わり、三男の三郎は九州地区の販売を担当した。八重原工場でのピアノ製作が進むにつれて、若手の職人がどんどんベテランになった。【図3-4】

昭和8年の八重原村事務報告書に、「松本ピアノ収入＝19,150円」が記録されている。ピアノ1台の平均価格が300円とすると、年間製作台数が60台余り、月産が約5台となる。生産台数は少ないが、八重原工場製作の松本ピアノ（S松本）の音色が評判になり、北海道から九州まで、全国各地に出荷している。【図3-5】

昭和8年、ピアノ作りの匠に成長した28歳の新治は、17歳の角田和子と結婚し、昭和10年に長男新一（新吉の孫）が誕生した。【図3-6、3-7、3-8、3-9】

『松本新吉伝』（大場南北、うらべ書房）

S マツモト・ピアノの主軸となった新治氏は、昭和8年、華燭の典を挙げた。「箕輪の新兵衛^(注)の花嫁さんは、飛びきりの美人だ」という評判が、口うるさい近在にパッと拡がった。それもその筈、新治氏は第一に美人であるべきこと、第二に頭脳が明晰でなければならない二条件のもと、白羽の矢を当てたのが、館山市の在の館野の角田家の和子さんであった。……

（注）「新兵衛」：松本新吉家の家号

八重原村という片田舎に建てられた松本ピアノ工場は、都会人の耳に入らなかったが、八重原工場を実際に訪ね、松本ピアノを見て驚いた人がいた。『松本新吉伝』(大場南北)によると、その人は声楽家四谷文子である。工場で松本ピアノを弾き、音色の美しさに驚いて、

「こんな田圃ばかりの田舎で、どうしてこのような美しい音色のピアノが生まれるんでしょう」

と言ったという。(資料編：引用記事参照)

3. 新吉永眠 【図3-10,3-11】

『松本新吉伝』(大場南北)によると、大正3年暮れの月島工場の火災で楽器作り原料木材を灰にした苦い経験から、生まれ故郷周南村常代の生家スナミに木材保管用土蔵を建てた。さらに、家を新築し、家族全員が常代に引越した。新居には、新吉の母みや、妻つね、二女愛子、三女光代、六男新治、四女幸子、七男剛夫、それに新吉、8人の大所帯になった。この家の新築は大正4年頃だったようで、新築後に五女起美恵が生まれている。

大所帯用の大きい家を探し、大正10年に八重原村外箕輪の旧家を購入した。敷地1,000坪の屋敷であった。旧家を大改修し、壁をすべて振り落とし、傷んでいる木材は更新し、壁には筋交を入れた。この改修が大正12年の関東大震災で威力を発揮し、外箕輪や常代の家の大半が倒壊したが、この家は少しも痛まなかった。

関東大震災の後、外箕輪の家の庭に、八重原工場を建て、ピアノ作りを始めたのは前述の通りだが、まだ常代の家で暮らしていた頃、菩提寺光聚院の吉祥和尚との交流が始まり、新吉が光聚院を訪れることが多かった。

昭和9年3月、ラジオで友松円諦の法句経講義を放送したとき、新吉は毎朝じっと耳を傾けていたという。熱心なクリスチャン新吉が仏教徒に転宗するきっかけになった。

八重原工場で、新吉期待通りのSweet Toneピアノが作られ、各地に販売されるようになると、ピアノ作りは跡継ぎの新治に任せ、昭和15年に、新吉は常代の旧宅地に8畳と6畳の二間だけのこぢんまりした家を見て、隠居の暮らしを楽しむようになった。昭和16年になると、福岡に住む三郎や、大阪の松竹少女歌劇の指揮者、四郎が新居に住む新吉、つね夫妻を訪れた。

『松本新吉伝』(大場南北)によると、この新しい家を訪れた菩提寺光聚院の吉祥和尚が、新吉のしみじみとした述懐を聞いた。

「私も到頭77になったが、もう借財は昭和9年以来全くない。借財がないということは、何とありがたいことか。私の生涯に借財が絶えたことのない、永い一生だったが、もう綺麗さっぱり、1文もない」と、心から嬉しそうに白い歯を見せて笑った。

新吉が借金に追われていた話は、『明治楽器製造者物語』(松本雄二郎)にも記されている。

母(三郎の妻)の話に、「お金を借りに祖父新吉が来た。金額は忘れたが、子供を背負って銀行に走り、お渡しした」と語る。昭和初期の話である。

八重原工場のピアノ製造、販売が軌道に乗る昭和8年までは、工場建設、若手職工の育成、旧宅購入と改造などの資金繰りに苦勞したことだろう。

昭和16年5月3日、常代の隠居所で吉祥和尚と歓談中、新吉は狭心症の発作で死亡。享年77歳。蝦夷松製の棺に納められ、葬儀が行われた。

『松本新吉伝』(大場南北)によると、葬儀の導師をつとめた吉祥和尚は柩の中に、大本山永平寺貫主からいただいて秘蔵していた熊の毛ホッス払子ハナムを饒ヒツギけに収めた。新吉と吉祥和尚の親密な交際が偲カンジユばれる。

松本新吉が亡くなった後、松本新吉にピアノの作り方、目的を明確にする生き方などを教えられたことに感謝する、ピアノ作りの弟子達、ピアノ調律師、松本ピアノ販売関係者などが集まり、松友会を作って毎年総会を開き続けた。会員は100人を超えた。

4. 二代目新治永眠 【図3-12.3-13】

二代目新治は、グランドピアノも作り、ピアノ作りの幅を広げたが、昭和16年12月8日、太平洋戦争が勃発した。いつの世でも、戦争が始まると消費が低下し、ピアノの需要が落ち込み、職工の中にも召集令状を受け取り、出征した若者がいた。全国のピアノ作りが中止になる。

ある国民学校の戦時中の記録：

「松本ピアノ店主ニ椅子修繕ヲ託ス」

「松本新治氏来校、児童机、腰掛ノ修理ヲナス」

「文書箱五本、松本ピアノ店ヨリ、注文ノ所完成、到着ス。一箇拾五円ナリ」

「家事調理台五組完成、松本ピアノ店ヨリ納入ス。一組ノ価格百五拾円也」

昭和16年に始まった太平洋戦争の影響はすさまじいものだった。海軍は木更津の巖根に、海軍航空機を製造、修理する第二海軍航空廠を造り、昭和18年には、八重原村と周西村にまたがる八重原工場を造り、機能の一部を学校工場、疎開工場（空爆を避けるための工場疎開先）に分散した。松本ピアノ八重原工場は疎開工場に指定され、航空計器班に属した。松本ピアノ工場には、木更津高等女学校、八日市場敬愛高等女学校の生徒が挺身隊として派遣され、計器の分解、洗浄、調整等を行った。

ピアノ作りは中止になっていたが、昭和19年、朝香宮鳩彦王アサカノミヤヤスヒコウの木更津国民学校御視察が決まった。

木更津の第二航空廠御視察の一環としての国民学校御視察だった。ところが国民学校にはピアノがなかった。昭和15年の火事で、校舎が焼け落ち、ピアノもなくなっていた。急遽、松本ピアノ工場が製作して木更津国民学校に納入し、朝香宮には音楽の授業を滞りなく御視察戴くことができた。

終戦後、ときが経ち、木更津小学校に新しいピアノが寄贈されたとき、戦時中のピアノを引き取った方は「宮様のピアノ」と呼んでいた。この方は、「宮様のピアノ」を君津市に寄贈した。「宮様のピアノ」の修復が完了し、平成22年2月22日、当会が市役所ロビーでランチタイムコンサートを開催し、「宮様のピアノ」を紹介した。

二代目松本新治は、終戦後体調を崩して昭和20年11月2日、亡くなった。40歳だった。和子夫人と二男一女が残された。「宮様のピアノ」は、新治の最後の作品となった。

戦後の松本ピアノ工場

1. 新治夫人和子の奮闘

戦後しばらくは、東京始め主要都市は焼け野原で、住む家がなく、配給米の滞りで食べ物が無い。衣食住のすべてが極端に不足だった。戦時公債は紙屑同然になり、さらに昭和21年2月の「新円」切替えに伴い預金引出し額の制限などもあった。仕事がなく、金もない失業者が増え続けた。【図3-14】

八重原工場には新治の弟剛夫、従兄弟の幸雄（新吉の弟利助の長男）と小堀好等ベテラン職工がいたが、復員した元の職工も戻ってきた。【図3-15】松本新治の未亡人 and 和子は新治の跡を継いだ。終戦後の大不況を乗り越える苦労は並大抵のものではなかった。

昭和21年の1月から和子がつけた出納簿が残っている。これを見ると当時の概要が窺える。

戦時にピアノ作りを止めたとき、新治が学校の机、椅子や下駄箱などを作っていたこともあり、まず筆筒、下駄箱など家具作りの仕事を始めた。客先の意向を確かめてから設計し、製作している。月末に工賃（職工の給料）を払っているが、昭和21年1月28日支払は、次のように書いている。

| | |
|-------------|---------|
| 1月分給料（6人） | 825円 |
| 1月分物価手当（6人） | 784円30銭 |
| 1月分残業手当（2人） | 43円20銭 |

戦後の物価上昇は激しく、半年で3倍になった。和子は、物価上昇手当も出していた。職工の数は、5～10人だったようで、毎月人数が変化している。これは、注文件数の変動にもよるのかもしれない。

昭和21年10月からピアノ・オルガンの修理、調律の仕事が入り、剛夫やベテラン職工が対応した。後には、調律の腕が上達した幸雄も修理、調律に出張している。

昭和22年には修理、調律依頼件数が増え、12月にはピアノの注文が入っている。価格は7万5千円。

八重原工場でピアノを作り始めた頃の値段(1台300円代)と比べると、200倍以上になっている。昭和23年から、ピアノ部品(アクション、キーピン、黒鍵など)の購入が多くなり、ピアノ作りが再開している。【図3-16】和子の働きは目覚ましく、戦後の大不況を見事に乗り越え、八重原工場が復活した。

昭和27年に有限会社松本ピアノ工場を設立し、未亡人和子が社長を務めた。有限会社になってからのピアノ販売数が、帳簿から、月産3～4台だったことが窺える。大正年間に月島工場で勤め、ピアノ作り、調律、整音などの技術を習得していた沢山清次郎が八重原工場を訪れ、ピアノの音色が良いことに感心し、ピアノのブランド名を(MATSUMOTO&SONS)とすることを提案し、昭和28年からこの銘にした。【図3-17、3-18】

(注) 沢山清次郎：

大正2年、22歳のとき松本ピアノ月島工場に入社、大正6年までピアノ作り、調律、整音技術を学んだ。特に、調律、整音は、松本広に学び、高度の技術を習得した。やがて世界中のピアノ会社を訪ね、我国の調律師先覚者といわれている。

昭和30年、ニッポン放送が、ラジオドラマ「ビルマの豎琴」を企画したとき、松本ピアノ八重原工場に、「豎琴の音に近い音色の楽器」製作依頼があった。松本ピアノ工場の職人達が工夫して、松本ピアノで豎琴風の音が出せるようになった。「ビルマの豎琴」放送の初めに、豎琴の音が松本ピアノ工場製作であることを紹介している。

『松本新吉伝』(大場南北、うらべ書房)

ニッポン放送は、次のような放送を流した。

「この時間は、マツモト・ピアノの提供でお送りいたします。美しい音色、豊かな音量、快いタッチ。それは松本ピアノの特徴でございます。松本ピアノは明治二十五年、松本新吉によって創立されて以来、約六十五年間、ピアノ専門工場として完全な設備と最高の技術によって、優秀な製品を送り出して参りました。御来場の皆様からは、外国の一流品を凌ぐという評判をいただいております。音質、タッチ、外装など、御好みに応じていかようにも調製いたします。御用命は、チバケン、キミツゲン、キミツチョウ、松本ピアノ工場へ。「ビルマの豎琴」に使用した琴は、松本ピアノに或る装置を施したものでございます。手軽に取り外しができ、この装置によって、ギターやバラライカの音色を出すこともでき、また、バッハや、それ以前の古典の研究には、チェンバロの代用もできるので、大変便利でございます。

良いピアノは、弾く人、聞く人の心を一つに結びつけます。良いピアノは、マツモト・ピアノからお選び下さいませ。

尚、この番組は、再放送のご要望にお応えして放送いたします」

(昭和30年度第一回文部省芸術祭放送部門参加作品「ビルマの豎琴」)

2. 三代目新一

新治の長男新一は、国立音楽大学付属高等学校を卒業すると、国立音楽大学で調律の講師を務め、その後、松本ピアノ作りを引き継いだ。三代目である。

(MATSUMOTO&SONS)は好評で、文豪谷崎潤一郎から松本ピアノ八重原工場に、令嬢用のピアノの注文があった。松本ピアノを納入して喜ばれたが、令嬢が結婚後に住む家がやや狭く、ピアノの置き場に困り、八重原工場で預かることになった。その頃、松本ピアノ購入希望者があり、谷崎家の了解を得て、富津市のさざ波館が購入、現在に至っている。

戦後の八重原工場を見ている宇都宮信一(『宮さんのピアノ調律史』の著者)は、八重原工場を

新吉さんは六男の新治さんを連れて千葉県君津に帰郷され、新たに「松本ピアノ」を興されることになったわけです。現在同地で、月産台数はわずか数台ですが、定評のある美しい音質のピアノ「マツモト・アンド・サンズ」を製作している有限会社松本ピアノ工場は、新治さんの奥さんの和子さんと長男の新一さんが後継されたものです。NHKテレビ《四季・ユートピアノ》に登場したこぢんまりしたピアノ工場です。

(『宮さんのピアノ調律史』(宇都宮信一、東京音楽社)

と紹介している。

『音楽の友』第34巻8号「日本のピアノ 創世期の先駆者たち」(泉清)

千葉におけるピアノ製造は六男の松本新治さんが継いだが、この方は不幸にして特殊な事故で死亡され、現在その奥さんの松本和子さんが長男の新一氏とともに有限会社松本ピアノ工場として仕事を引き継いでおられる。このマツモト・アンド・サンズというピアノは、月産わずか数台であるが、奥さんに似て、目の覚めるように美しいと伝え聞いた。一家揃って70年以上もピアノを作り続けているのは松本ピアノだけである。

和子社長と三代目新一を中心に八重原工場で作りに続けた名品松本ピアノの発注は続いたが、東京オリンピック開催をきっかけに日本の産業が急成長すると、分業方式の大量生産でコスト削減した会社だけが生き残る世の中になった。

昭和58年(1983)、和子社長が永眠。67歳だった。

昭和20年の二代目新治の永眠から38年間、和子は八重原工場をよく活動させた。職工は腕を磨きあげ、音色のいいピアノ作りに熱中した。和子永眠で、有限会社松本ピアノ工場は新一夫人衣子が引き継ぎ、三代目新一が一人でこつこつと作り続けた。その様子は朝日新聞【図3-19】などが報道している。しかし、時勢に抗しきれず、平成19年(2007)に工場を閉鎖し、大正13年(1924)の創業以来83年にわたる歴史の幕を閉じた。

松本ピアノ八重原工場の職工（ ）内は参考事項

(1) 八重原工場設立～終戦まで

- ・小堀好 ・小堀熊治(西ピアノ商会) ・三倉基次(戦死) ・小堀弘 ・大場正雄(石産工業)
- ・近藤貞夫(松本つね縁故者) ・中島順二郎(東亜ピアノ商会) ・伊藤次郎 ・伊藤久雄
- ・田中信男(全国ピアノ技術者協会会長、武蔵野音楽大学ピアノ管理者) ・三倉三之助
- ・榎本長蔵(戦死) ・岸弘陸 ・榎本保 ・能城正 ・福田亀松 ・白石盈一
- ・松本一雄 ・松本利助(新吉の弟) ・松本剛夫(新吉の七男)

(2) 終戦後の職工

- ・松本剛夫 ・松本幸雄(松本利助の長男) ・小堀好 ・戸倉孝一 ・榎本保 ・大野武
- ・前田武夫 ・三辻亨二 ・長谷川勝治 ・荒井裕 ・長谷川重吉 ・谷弘